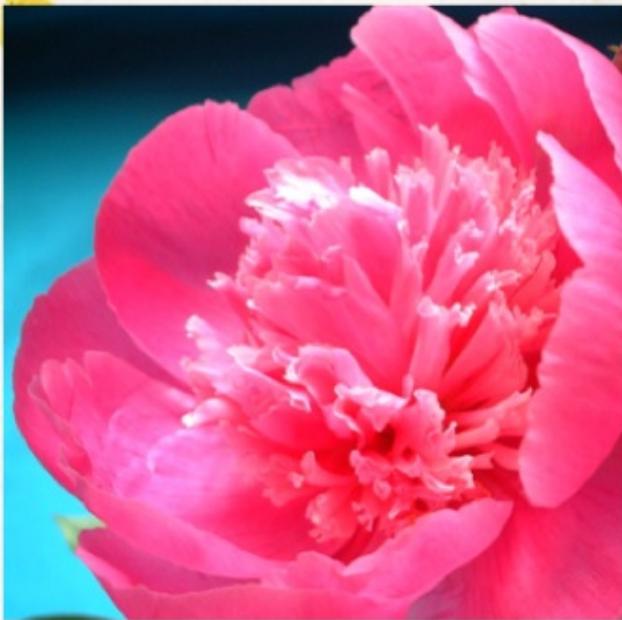




そんな最低な、

愛すべき日々。



この人が宇宙にも行ける時代に雨を防ぐ手段が傘って！

「この人が宇宙にも行ける時代に雨を防ぐ手段が傘って！」

と京介が言った。空を見ながら絶望的な表情で。

確かに。

こんな科学の発展した時代、自動的に水滴を察知して弾く機械とか発明されてても良さそうなものなのに。

とりあえず学校の傘立てから無難なビニール傘を見繕って(他人の？いやいやビニール傘は人類共通の財産だ)広げながらぼんやり考えてみる。イメージするとSFくさい。

「だってかなり昔から傘って変わることなく存在してた訳だ。そりゃ防水性の向上とかワンプッシュで開くようになったとかの進化は有ったし、折り畳みに成功したのはかなり画期的なアイデアだったとは思うけど、足元が濡れるとか風が吹くとてんで役に立たないとかの致命的な弱点は放置されっぱなしで・・・うわっ古代ギリシアの時代から傘って有ったんだって！」

どうやら携帯で傘の歴史を調べていたらしい。

・・・話しながら器用な奴。

「てことは、その時代から今までの人類みんな、ホメロスも小野小町もナポレオンもマイケルジャクソンも、雨の日には傘をさして、それでも尚濡れていく足元に堪えていたってことだ。時には風で傘が逆向きになるようなコミカルな目にも有っていたかもしれない」

これからの未来人だって雨を防ぐ新発明が為されない限りは同じ問題に直面する訳だしね、とまだ隣でくっちゃべり続ける横顔を見上げて学校を出た時点から気になっていた事を問いかけてみた。

「ホメロスも小野小町もナポレオンもマイケルジャクソンも未来人もどうでもいいんだけどさ、」

「うん」

「なんであんた私の傘と一緒に入ってるの？」

おかげで足元どころか肩だって濡れるのに。

「そりゃ誰の物かも知れないビニ傘を借りパクするのは良心が咎めたから・・・ってのはもちろん冗談でえ」

語尾が焦っていたのは私が途中で奴を傘から蹴り出してやったからだ。
こいつが普通の人間みたいなことを言い出すと鳥肌が立つ。

「ただ君と相合い傘で帰りたいんだ、って言ったらどうする？」

まあさっきからの話はコレがあるから傘も結局捨てたもんじゃないってゆう結論にしとくかな
と言って笑う声を聞きながら、どうするも何も、と思った。

わざとらしい相合い傘も、つらつら流すくだらない話も。

要は雨の日にはどうも気が滅入る私を気遣ってのことだと気付く程度にはコイツとは付き合いが
長いのだ。

君は猫だからね、と隣の男が歌うように言った。

ある日の白い薔薇

あるひ、みちをあるいていたら、とつぜんみしらぬおに一さんにおおきなばらのはなたばをぶれ
ぜんとされました。

なんてすてきなおはなしでしょう！

「つかそれ怖いよ」

的確なツッコミだと思う。

でも実話なんだからしょうがない。

学校からの帰り道、後ろから肩を叩かれ振り向くと目の前に薔薇。思わず受け取ると何も言わず
に渡した奴はダッシュで逃走しやがった。見たこともない奴だった。・・・何コレ、新手のイタ
ズラ？

「ソレにしちゃ一金かかってるよね」

これアバランチェだよなあ・・・。と観察しながら京介が言う。俺でもこんなのピアニストの彼
女が大きな会場でコンサートするって時にプレゼントしたことが1回あるだけ・・・。1本800円
とかするんだよコレ。

それを聞いて急いで本数を数えてみた。・・・結構良い値段だぞこれは。途中でポイ捨てしなく
て良かった。

いきなり抱える程の薔薇の花束を渡されて、さてどうしようかと途方に暮れた。一応手紙や異物
の類が混入されてないかチェックして(普段恨みをかかってる覚えが無い訳でもない)、そうゆう物も
なかったのととりあえず持って帰る事にした。まあ花には罪は無い訳だし。けして高そうだった
からという理由ではない。

しかしそれを持ったまま帰ってくるというのはかなりの羞恥プレイだった。途中乗った電車での
周りの目の痛さといったら、電車の窓から投げ捨ててやろうかと思ったくらいだ。まだ赤薔薇じ
ゃなくて白薔薇だったのが救いか。

「見たかったなあ、白薔薇を抱えたりラ。さぞや絵になったろうに」

心底残念そうに京介が呟く。コイツが家に来たのは適当な酒瓶に花束を突っ込んだ後だったので
、嬉しいことにその恥ずかしい姿は見られなかった。見られたら指差して爆笑されていた事だ
ろう。

「で？ どういうつもりでその人は相当値の張る白薔薇の女王をリラに渡していったんだろうね」

何も言わずにカードも無しだからノーヒントだしねえ？と解ってるだろうにニヤニヤ笑いながら聞いてくる。変な方法とはいえやはり行き着く所はひとつだろうし。

「白薔薇だっていうのに注目するなら・・・花言葉は尊敬だけど」

解っちゃいるけどつまらないから微妙に違う事を言ってみる。

「花言葉に注目するならこの場合やっぱりイギリスの方じゃない？」

・・・逃がす気はないか、容赦がない。

「・・・"私は貴女に相応しい"」

「そうソレ」

やり方はかなり変態めいてるけど結局はやっぱり告白って事だよー近いうちにアプローチあるかもよ??と面白そうに言う京介にフッと笑って言ってやる。

「花束渡した途端に何も言わずに逃げ出す様なチキンに相応しいとか不愉快以外の何物でも。」

「ハハハー言うねえ。じゃあ向こうから本当に連絡有ったらどうするのー？」

うーん、と少し考えて。

「綺麗な薔薇のお返しに、薔薇の枝でもあげようかな」

花言葉は"貴方の不快さが私を悩ませる"

「えー、レベル高くない？相手の教養が高くないと嫌味すら通じないんだよー？」

「そこからさらに黒赤色の薔薇返してくるようなら面白そうだから付き合っても良いかな」

「・・・そこまでできる若者がこの現代日本にどれだけいるのさ」

ここにいるじゃん、と返せば俺を比較の対象にしないでよと呆れられた。

次の日。

いつものようにリラの家に行って、先に風呂入れば？と言われたので行ってみると、湯舟がアバランチェの花びらをふんだんに使った豪華薔薇風呂になっていた。上がってからリラに物言いたげな視線を向けると、

「枝が急遽必要になったから。」

だから花の方の処理に困って、と事も無げに言ったのだった。

※黒赤色の薔薇の花言葉:呪います・死んだら化けて出ますよ

ナベとガイドブック

「やっぱり行くべきは東南アジアだよな」

うちのソファで寝そべりながら京介が呟いた。

「こんな寒いなかただ春になるまで耐え忍ぶなんて愚か者だよ、日本は冬でも地球には花開く常夏の美しい国々もあるというのに!!東南アジアなら近さも手頃で物価も安いし…タイ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、…プーケットとかやっぱり人気だよな」

あーこれなんてマレーシアの無人島で水上ヴィラ貸し切りだって、高そーとか呟きつつ持って来たらしい色とりどりのパンフレットをテーブルに広げて掻き回してる京介にちょっとどいて邪魔、と告げてパンフレットを避けて確保したスペースにガスコンロごと鍋をドンッと置いた。

どうも最近コイツが入り浸っている気がする。

コイツが言うには「リラの家は本とお酒と音楽が溢れてて居心地いいよねー」ということらしい。確かにそれは認める、ものすごい量のそれらがうちにはある、好きだから。コイツも好きなのにコイツ自身の家はビックリするほど殺風景で物がなく、確かにコイツの家に行くよりかは私の家にいたほうが色々あって便利…と、いつのまにか一緒に過ごすことが当たり前になっているけど、普通付き合ってもいない男女がこんな一緒には居なくないか??

「リラ何処がいい??」

「プーケットはあまりにも観光地っぽすぎて嫌」

「やっぱりそうだよなー」

互いにナベをつつきながら会話。今日のナベは京介の持って来た鶏肉を突っ込んでの水炊き風、タレはポン酢とあっさり柚子胡椒。

その後の食事中もずっとインドネシアは本当に海が綺麗だからマジにバカンスになるしそれならやっぱりバリ島かなサーフィンとかダイビングもできるしいいやいや向こうは雨期なのか海はちょっと心配だよなそれなら世界遺産ツアーで東南アジア随一のアンコールワットがあるカンボジア、ボロブドゥールのインドネシア、パガンのミャンマー…などと京介は鍋の中身が空になるまでペラペラと喋り続けていた。黙って聞いていたが食事が終わってキリも良いので京介の演説に割り込んでみる。

「てゆーかアンタ実はもう何処がいいか決めてるでしょ」

「あ、バレた??」

さっすがリラちゃん、と胡散臭く驚いてみせるコイツにフフン、と鼻で笑ってやる。腐れ縁とは便利なものだ。

「あーそんじゃ発表するけど…ちょっと待ってね」

と、食べ終わったナベを持ってキッチンに向かった。晩御飯の後はお酒を飲むのがいつもの流れだ。お互い家で飲むときは注いで飲むのが面倒になるとそれぞれワインボトル片手に直接飲みだすような酒好きかつザルなのだった。気を使う必要のない関係はやっぱり便利だ。案の定当然の様にリキュールを引っ張りだしてシェイカーを振るシャカシャカという音が聴こえた。

お待たせー、と不自然にグラスを隠す様にして戻ってきたのを少し気にしつつも私もチーズとサラミを出して準備万端。

「で、何処に行くかなんだけどさ」

そこでスッと後ろからピンク色の液体の入ったグラスを出して。

「コレをラッフルズホテルのロング・バーまで飲みに行こうよ」

シンガポール・スリング。

ナベとガイドブック 2

迂闊にも何秒か停止してしまった。

その後、

「…ブハッ」

アハハハハ、と笑いが止まらなくなった。だって、コイツ、あまりにも。

「キザッ！あんたキザ！キマッてただけに尚更笑える!!」

指を指してハハハハハッと笑ってやった。えー引かれるかなとも思ったんだけどリラなら絶対ウケると思って。キマッてたでしょー。とかヘラヘラしながら言い出すコイツもそのうち耐え切れず一緒に笑い出した。

お互いあまりのキザさが面白かっただけじゃなくて。

上機嫌になっていたのだ。それぞれが相手の期待を裏切らなかった事に。

カクテルの中で私がシンガポール・スリングが一番好きだというのはよく行くバーでいつも飲んでて知り合いのバーテンダーさんにも言われてたからまあコイツが知ってるのにも驚かないが。

うちにあるカクテルの作り方の本の中にシンガポール・スリングはラッフルズホテルのロングバーが発祥と書いてあるのを見て、一度行ってみたいと思っていたのは別にコイツに言ったことも無かったのに。

シンガポール・スリングをラッフルズホテルで、ていうのがツボにハマった私もマニアックだが、コイツもそのネタを私が知っていると信じてたあたりなかなかだ。

ひとしきり笑って氷が溶けて薄まったカクテルを飲みながらひとつ気になっていた事を聞いてみた。

「今から行くなら正月挟むように行くよね??あんた彼女はいいの??」

「クリスマスさえ一緒に過ごせば義務は果たした事になるんじゃない」

肩を竦めてしらっと言うコイツにうっわーアンタ最低。分かってたけど。と言ってやった。

「リラこそ今彼氏いるよね」

知っててよくこれだけ人の家入り浸るね、と言ったらリラ彼氏家に入れなからいいじゃん、と返された。

「居るけど束縛ウザいからクリスマスまでには切る」

「うわひっで」

リラこそ最低じゃん今の彼氏まだ3週間とかじゃね??と言うからあんただって今の彼女一週間目でしょと言ってやったら京介はじゃあお互い様かとやけに神妙な顔で頷いた。

そこでやっぱり期待を裏切らないお互いの最低っぷりに安心して、またケラケラと笑いあったのだ。

コイツにだけは、善人面されてたまるもんか。

イングリッシュ・ブレックファーストが本当に美味しいかについて

「まあ…マズイとは言わないけど」

イギリス。ロンドン。の、それなりに名の知れた四ツ星ホテルの朝食にて。発した第一声は見事にハマった。

学校は夏休み、あまりお金には困っていない身の上、ワーズワースだのコールリッジ、いやいや渋くフロストといった名詞が掲載されている通常の若者らしくない語彙、「そういえばまだイギリス行ったことないな」「あ、俺もー」というある日のやる気のない会話、そんなそんなが重なり合って生じたこんなロケーションにての一場面。

一般的にイングリッシュ・ブレックファーストは美味しいといわれている。そして、イギリス人は料理が下手だともよくいわれている。

そんなパラドックスを体験出来る事を楽しみにしながらこの朝食に臨んだのだ。

「まあ…油っこいってのは聞いてたけどねえ」

フォークに刺したベーコンを眺めながら言う目の前の京介が言う。イングリッシュ・ガーデンに設えられたテラス席が無駄に似合う男だ。テーブルマナーも完璧。

「日本人からみればどこの料理も油っこくて当然ではあるけどね」

あのウェイターカッコイイなあ、と眺めながら答える。目が合ったのでニッコリ微笑んで、悪いけど貴方の所の自慢の食事は美味しくないわ、と心の中で呟いた。ついでに原因を少し真剣に考えてみた。量が多いのがプラスなのか??しかし単純に味だけで評価すると他に美味しい国が…と考えているとある仮説が閃いた。

「ヨーロッパで食べ物が美味しい国といえば??」

「まあ代表というならフランスとイタリアだろうね」

それが??と目線で問う目の前の男に答えて思い付いたことを述べてみた。

「その美食2大国は普通朝食を習慣として食べない、作らない。夕食が遅いからね。ホテルでさえそうで一般家庭ではトーストを焼く主婦はよほど真面目だといわれるほど。だから実際は不味いイングリッシュ・ブレックファーストが世界的名声を得ているのは…」

「…比較される対象がないから、ってこと??」

「たぶん、ね」

他のヨーロッパの国々の朝食事情までは知らないが、ヨーロッパグルメランキング朝食部門は層が薄いというのは確かなんじゃないだろうか。

なるほどね!!マイナー競技なんかも下手でも競争相手が少なくて表彰台に登れたりとかするしと感心して頷く京介を見ながら、我ながら一緒に海外旅行していて同じ部屋で一晩を明かした男女二人にしちゃ潤いの無い会話してるよなあと思った。幸いにも日本語なので近くでこっちをチラチラ気にしている髭がセクシーなウェ이터さんは自分の所の食事がボロクソに言われていても解らないけど。

私達2人とも見目は悪くないので傍から見れば艶っぽい会話をしているように見えたりするだろうか。

私達は恋人ではない。友達と言ってしまふのにも抵抗がある。そんな相手はお互い別において、どうも私達はいつもこんな議論めいた話をしているが、私もコイツも普通の友達や恋人にはちゃんと普通に喋る。普通にとは、テレビや音楽、共通の友達、あとは恋愛の話のこと。

モットーは他の人が理解出来る話題をみんなと同じ意見になるようにということ。もちろん話方だってこんな乾いたのじゃなくて女の子らしく。目の前の男は軽一く。深い事話す脳みそ持つてる奴なんていないしね、となんの躊躇いもなく言うコイツは人間として最低な奴、関わらない方がいいという気もするが、こうして2人で旅行してたりする現在だし、最低のくだりはお互い様だと自分とそっくりな笑い方で笑われる。

お互い一目見た瞬間に解ってしまった、目の前のコイツは自分と同じ人間だと。「世間の普通の善人達」を見下すと同時に恐れていて、自分を偽って同じソレを演じずにいられない人間だと。2人とも自分が善人等ではないと気付いていながら。善人はそうでない人間に対してはとても残酷だから。悪だと知られば正義のミカタに成敗する大義名分を与えてしまうから。

同じだと気付いてからは何故か離れられない。

近くに居れば同属嫌悪に陥ったりするし、演技をせずにはいられて疲れはしないけど生産性もないというのに。

かといってふとした時に相手が世間を相手の演技に疲れて暗い穴に捕われそうになっているのを見るとまるでそれが自分であるかのようにゾツとして手を伸ばさずにはいられない。

そうして定義する言葉のない奇妙な関係は続いている。近いのは共演者??

共犯者??

それか同好の士かなあ。

確かめる為にテーブルの上のバラの花を見て「病むバラよ」と呟やけば「ウィリアム・ブレイク」と即答された。教養が同じくらいという相手ってなかなかいないからしょうがないか、と一人で納得した。

退屈が引き起こす一事象

暇が続くと人間ろくな事を考えない。

それが普段は完全に猫を被って完璧なキャラ設定で男女問わず人気者、それに伴う妬みややっかみも長年鍛えた技術で華麗にスルー、それにより周囲の人間関係を良好にキープ、全く完全無欠の学生生活、を謳歌している私にも当て嵌まる。そう、良好にキープしすぎて平和が続いてつまらなくなったのだ。

平和なのはいいことだ、と普通の人には思えるかもしれないが、私には駄目だ。時々は何か手応えのある問題が持ち上がってくれないと本当に退屈で気が滅入ってしまう。

いや、本当はもっと重症か。平和な日常が続くと猫を被って周りと合わせているのが苦痛で堪らなくなる。こっちは必死で常時頭を巡らせて普通の人基準というものを自分のなかに作って発言、行動しているのに、他の人は何の疑問も持たずに生活していると思うと薄ら寒くて堪らない。そしてそう思うと、とたんに周りの人の考えを読んで行動するのが面倒になって「もうどうでもいいかなー」なんて無気力になる。結果普段は完璧な振る舞いが適当になってミスが出始め問題が起こるという訳だ。

一度問題が起こればその処理に追われて忙しいのでくだらないことを考えずに済むしそれなりに楽しめるのだが。ただアイツに不様だとケラケラ笑われるのが腹立たしい。

時期が悪かった。季節は梅雨で雨が続けていた。雨の日は本当に鬱になる。それは私が猫だからだとか言った男は4股がバレそうだとか言ってそれは楽しそうに対処に追われていて(4股って馬鹿か)、それを見て余計に自分の周りがつまらなく思えたというのも理由のひとつか。

とにかく、そんなこんなの結果として、ふと自分に気を持っている教師をからかって遊んでみよかなーなんて考えを持つに至ってしまった訳である。

普段なら色恋沙汰の問題なんかは京介の分野で、私はいつもは綺麗な関係しか持たなかった。別れ際にゴタゴタするような事すらないようにしていた。というより普段はメリットがないような行動は取らないのが普通なのだが、本当に退屈というものは手に負えない。

ターゲットになったのは冴えない中年教師。ずっと前から私を見る目が違って、でも行動までは起こせないようなタイプ。こんな恋愛に疎そうなのを相手にしたら後々面倒そうだというのも普段なら気づけたはずだ。

ほんの暇潰しのつもりだったので肉体関係まで持ち込む積もりはない、っていうか考えるのも気持ち悪いみたいな相手だったので、まぁデート2回ってところか、そしたら後々成績とかに効くいいカードになるかもという打算もないでもなかった。

というか実は教師たぶらかしは京介と賭けて仕掛けた事が既に有って2回目だったので(どちらが

先に落とすかで私の勝利)、ナメていたのであった。

そして現在。

恋愛下手な相手はデートまで持ち込むのに意外と苦労していい暇潰しになった。でも苦労したのは最初だけであっさりデート2回はクリア、したのまでは良かったが、なんとその後相手が半ストーカー化してしまった。

もともと目標をクリアしたら、その後もう連絡を取らない様にしておけばそのうち気付いて引くだろうと思っていたのだがとにかくしつこい。日に何通もメールは来るし放っておけば家にも手紙、お決まりの無言電話。

それはまあ時間が経てばなくなるだろうと気楽に考えていたのだが、学校で会ってゾッとした。目付きが異常だった。

これは何事も無く終われないかもしれないな、と思った。この頃には梅雨も明けていたのでまともな思考回路が戻っていたのだ。

うん、だから付き纏われるくらいは予想していた。学校からの帰り道で追い掛けられて今はちょっと隠れている所、このカフェに入ったのは見つからなかったはずだ。

コーヒーを飲みながら今後の行動を考えてみる。学校側に訴えるのは私の評判に傷がつくから却下。かといってこの感じじゃストーカー行動は順調にエスカレートしていったら警察沙汰にまでならないとも言い切れない。流石に命は惜しいし。だから理想は何か一方的かつ強力な弱み見付けて諦めて貰うしかないかなあ。

そこまで考えてひとつため息。梅雨を引きずるこんな事ちゃっちゃと済ませたいし、そうになると一人じゃ厳しい。

ちょっと痛いけど仕方ないか。
携帯を開いてメールを送った。

「ふーん最近会わないと思ってたらそんな楽しいことになってたんだー」

やたらキラキラとした笑顔で京介が言った。その顔からは人の不幸は蜜の味。という文字が読み取れた。

「てか見たよ。三木先生。来るときに。」

「やっぱまだうろついているのね・・・」

わかっちゃいたけどめんどくさい。

「弱み握るねえ。まあ協力するにやぶさかではないけど…」

「ハイハイ。お礼はするから」

もう諦めてそう言うと言外といや今回はいいよ、とあっさり言われた。

「嘘、あんたがタダ働き??」

気持ち悪いんだけど、と目線で訴えればまあね、とコイツが珍しく穏やかに答えた。

「俺も忙しくて梅雨だったのにリラちゃんとあんまり遊んであげられなかったし??」

だからちょっと責任感じてさーととたんにフザケて言い出す京介に思いっきり冷たく馬鹿、と切り捨てて鞆から出した適当なノートを広げる。

「簡単かつ効果的な弱み握る方法でも早く考えるよ」

「ハイイ。あ、その前にリラ」

「ん??」

取っておきの笑顔で笑って。

「ずいぶん下手を打ったねえ。不様だなー。」

…これがヤだからコイツは呼びたくなかったのに。

退屈が引き起こす一事象 2

数日後。

簡単かつ効果的、なおかつちょっと卑劣??な手段を行使するためにいつも何通か届いている京介へのラブレターの中から適当なのを見繕って告白の場所を確認し、そこに例の先生を私の携帯で呼び出した。ちなみに一番人気のなさそうな所選んだから校舎裏。本当は体育館倉庫とかベストなんだけど、流石にそんなトコで告白しますなんて女の子はいないみたいだった。

後は細々と下準備をして。舞台は整った。

ちょっと女の子は怖い思いするかもしれないけど、まあいいタイミングで王子様に登場してもらうから。

告白場所で京介を待つ女の子、そこに来る先生。

…てゆかこの作戦思いついたのは京介だけど、よく自分の事好きな女の子をこんなことに利用できるよね、人としてどうなの。

まあそれは置いといて。

そこにいるのが私だと思い込んでいる先生は訳の解らない事を呟きながら女の子に襲い掛かる!!ってほどでもないけど人気のないところでなんか呟きながらオッサンが急に近づいてきたらビックリするよね。

本当に襲い掛かれたらシャレにならないからちょうど良いところで京介が飛び込んで女の子を庇うようにして立ち、かつそこに居たのが私じゃない事に気付いてオロオロする先生に「こんな所で生徒に何する気だったんですか」と大声で怒鳴る。これにはいきなりの事でちょっと訳分かってなかった女の子に説明する効果もある。そうか自分は襲われそうになったのか、と。

バレたら大変なことになりますよ、と京介が続ける間に女の子は泣き出したからちゃんと理解してくれたみたいだ。女のコの涙は効果抜群。そこでいくら嵌められた事に気付いた先生が否定したって説得力は全くない。

まあバラしたりはしませんけど、と京介が続ける、先生も魔がさすなんてこともあるでしょうから今回は誰にも言いませんけど、もしこれからも生徒を対してそういう風に見てるって聞いたら流石に然るべき所に訴えますね、僕の良心が痛むんで。

良心って。外で聞いてて笑いそうになった。へえあんたにそんなの有ったんだ知らなかった。

ちなみに私が何してたかというといざという時の為の見張り&撮影係。古典的手段だけどやっぱり物的証拠があると安心。後で見たら薄暗い校舎裏というロケーションと相まって女の子に近づいていく中年男性という図はなかなかの迫力に撮れていた。

話を戻すけど生徒に対してという所で心当たりがある先生はギクツとする。一方で女の子は自分の為に言ってくれてるんだと思ってうっとりした眼差しで京介を見ている。そりゃ元々好きな人なんだから当然。この子は今後話を大きくしないために口止めの必要があるから今後彼氏になる京介には感情が大きくなっていく方が都合がいい。

実はこの作戦を立てている時、また彼女増えるね、と言った私に今は一人しかいないから全然大丈夫とか言い出したコイツだ。そう、あの梅雨の時に4股がバレかけ、誰を彼女として残すか考えた京介は面倒になって一度全員清算していたらしい。呆れる。

まあそんな訳で一応片付いた。女の子のアフターケアは京介に任せるとして、後は先生の経過観察。このまま大人しくなれば良いけど自棄になっておかしい行動したりしないか一応チェック。でもそんな度胸はなかったらしいので本当に一件落着。引きずっていた梅雨がようやく終わった。

「やっぱりリラは雨ダメなんだねー。行動が明らかに考え足りなくなるじゃん。俺と会う前とかどうしてたのさ」

一応、礼として奢ってあげたアイスを食べながら京介がニヤニヤしながら言う。

「会う前は会う前でなんとでもしてたわよ」

私もアイスを食べながら。京介の手を借りたのが悔しくて少しムスツとしながら言う。

「アハハ、リラ一人でもなんとでも出来るのもわかってるけどさ。まあ俺も楽しめたしー？中々良い顔してたよね、嵌められたのが分かった時のセンス」

「非情なヤツね。私は先生が可哀相で心が痛むわ」

「俺も本当は人を騙すなんて事しちゃって後悔してたり…ホラ、俺って心根は優しいヤツだから」

そこで顔を見合わせて。

「嘘ばかり！キャラに合わないこと言わないで気持ち悪いから！どの口で心根が優しいとか」

「リラこそ何殊勝な事言ってるのさ、そんな事カケラも思っていない癖に！！しかもそんな虫も殺さなさいな顔してさー。」

こうしてお互いの最低さをケラケラ笑い合える相手がいるだけで救われるって事か。

少なくとも一緒に居れば退屈せずにはいられるよねー。と京介がまだ笑いながら言って、そういえば梅雨の憂鬱がどこかに吹き飛んでいることに気が付いたのだった。

なんか近い、何故か近い

あ、まただ。

ふと気付くと目の前にリラのどアップの顔。お互いそんなに低くはない鼻がくっつきそうだ。

なんだか話に熱中するといつのまにやらどちらからともなく顔を近づけてしまうらしい。いや顔だけではなく、気付いたときにはどちらかが相手の肩とか腕を掴んで引き寄せている事がザラにある。

一度なんか無意識にリラの白くて細い首を鷲掴んでいたことがあった。でもなんか息苦しいなと思ったら襟首を捕まれていたこともあるのでお相子か。

いつもそうになっている間は会話に熱中しているので気づかないのだが、話題が一段落してフゥ。と息をついた瞬間にあまりの近さに驚くのだ。

多分傍から見れば引き寄せてキスしようとしているのか、はたまた殴ろうとしているのか、の様に見えるだろう。

この子顔はいいんだよねえ。

近くにある顔をじっと見る。可愛いというより綺麗な顔立ち、日本人には珍しいくらいの白い肌。今は話に熱中していてほんのり頬がピンク色に染まっている。

うん、充分近距離でも鑑賞に堪える。

そんな風に観察していたら目の前のキレイな形をした眉がキュッ、と寄った。急に黙ったのを訝しんだらしい。

「どうかしたの？」

リラ自身はまだこの近さに気付いていない。

「いやなんでも…で何処まで話たんだっけ」

近くなっている時に気付くのは珍しいからこの際ゆっくり鑑賞しようと思ったのに、迂闊にも話している途中のテーマが解らなくなっていた。マズイ気付かれる。

リラは一瞬ますます怪訝そうな顔をしてから、ようやく顔の近さに気付いたのかバツと身を引いてしまった。残念。

「なんか今邪な事考えてなかった？」

「いや全く」

それこそ全く信じていないような目で見られるので仕方なく考えていたことを言ってみた。

「ただこんなに綺麗な顔した子のお腹の中がこんなに真っ黒いなんて神様って皮肉だよなあ、って思って」

この顔さえなければ騙される人減るかもしれないのにね、と離れてしまった体温が惜しくなって引き寄せ、頬に手を添えながら言った。

するとリラは頬に手を添えられたまま艶やかに笑んで。

「それは自分に言ってるの？」

と。

うん、流石。これがリラ。

期待を裏切らないリラに嬉しくなって引き寄せた体をそのまま抱きしめてみる。
アハハうっとうしいなあ。と言いながらも腕の中で大人しくしているのでリラも割と機嫌は良いらしい。

「今日このまま泊まってっていい？」

「てかいつも泊まってるじゃん」

とクスクス笑いながら言うので本当に今日は機嫌が良いみたいだ。さっきとは違う俺の好きな柔らかい感じの顔で笑っている。あ、でも、とリラが続ける。

「佐伯さんにはバレないようにしてね」

「カナがどうかした？」

俺に彼女いるのなんかいつも気にしないのに。

「この間牽制されて」

京介は私の彼氏なんだからちょっとは考えてよ、2人で遊ぶとか信じらんない、って。情熱的だよな。泊まったなんて知ったら憤死しちゃうんじゃない？

「あー…こないだの根に持ってるか…なんかゴメン」

別にリラとはやましい所なんてないから(肉体関係が無いって意味で)割と彼女にはリラと遊んだー。とかは素直に言ってる。学校ではそんなに仲良いそぶりは見せてないから、まあ彼女はリラと俺とは只のトモダチだと思ってるはずだ。なのに二人で遊んだとか言ったら怒られた。

「なんか彼女厄介そうじゃん…結婚したら『私と仕事どっちが大事なの!?!』とか言い出しそうなタイプ…」

「まあそのウザさと紙一重の嫉妬が可愛くていいんだよ…て、リラ眠いの?」

話すのがゆっくりになってきたなあと思ってたらいつのまにか胸に持たれて目を閉じていた。

「んー…暖かいし…」

「…可愛いこと言うね。いいよ寝ても。ベッドに運んであげるから」

顔にかかってしまった髪を退けてやりながら言う。ついでにじゃれついて首筋に鼻を擦りつけてやった。

リラも外出るときは香水を付けているけれど今はもう取れていてただリラの肌の匂いがするだけだ。

優しくて眠くなるような、柔らかくて好きな匂い。性格はキツイのに匂いだけはひたすら優しい。

リラはちょっとくすぐったそうにしてからそれでも直ぐに眠ってしまったのでベッドに運んで寝かせた。が、ちょっと悪戯心が働いて一緒に布団に潜り込んでみた。

他の相手にはスレていてこんな隙なんて絶対見せないだろうに、俺にはどうも無防備だ。どうやら俺達は鏡のように似過ぎているからそうゆう対象として見ないだろうと思っているらしい。確かに出会った頃は吐き気がするくらいそっくりだと思ったからそんな気にならなかったが、それなりに違う所もあるらしいと気付いた今はそんなに安全でもないんだけど。

まあ今は良いけどさ、と軽く頬にキスをしてからちょっとほくそ笑んだ。さっきのリラが言った俺の彼女がリラの家に泊まったなんて知ったら憤死するという言い草を思い出して。じゃあ同じベッドで寝たって知ったらどうなるかな、と考えたら面白くなってしまったので。

なんか近い、何故か近い 2

「私と間垣さんとどっちが大事なの!?!」

凄いホントに言ったよりラ。

バレないように、って言われてたのに昨日なにしてたのとしつこく聞かれて面倒になったからリラン家行っただけってしてしまった。ついでに昨日想像したことを思い出して、ついそのまま一緒に寝た。と言った所でヒステリックに叫ばれたさっきの台詞。

泊まったのは本当だけど何もせずに平和な朝を迎えたのに。起きたリランは一緒に寝てた事について「狭いんだけど」で終わってしまったのに。なんかとことん苛虐的な気分になってきて、そーだね、と極上の笑顔を浮かべて言ってみた。

「どっちが大事かって、そりゃーもちろん」

サボるけど付き合わない??とメールしたら来てくれたリランは顔を見るなり吹き出した。どうりで、さっき佐伯さんに泣きながら睨まれたんだよね。と言うリランにアハハゴメンと言えば、まあ大した被害じゃないし。ただ今後の噂立てられる事についてはなんかヨロシク。と言うのに頷いた。

「それで?」

「え」

「何言ったの」

期待に満ち溢れたキラキラ顔で聞いてくるから素直に答える。

「私とリランどっちが大事って言うからそりゃーもちろんリランだって」

って言ったら叩かれた、と赤くなった頬を指さしたら途端に吹き出してケラケラ笑い出すリランを見てなんだかせつない気分になった。

「やっぱり情熱的な子ね。か京介そうゆうので私って答えて叩かれるパターン何回目かだよ」

それなんか楽しいの??と笑いながら言うリランにまあねーと答えながらここまで気にされないのもなんか悔しいなあ、と思った。

まあでもこうやって心底から笑ってるリランの顔は、その綺麗な顔が浮かべる表情の中でも一番好きだ。花開くというか周りの気温を上げる事が出来るような笑顔で笑えるって事にこの子は気付いているだろうか。いや普段の完全に作っている顔でしか笑えないんだって思ってるんだろーな

。知ってる限り俺の前でしか本当の顔は出せないみたいだし。

笑顔だけじゃなく世界の終わりとでもいいかげんな本気で嫌そうな顔とかも見せるのは俺にだけ。まあ遠慮がないとも言えるけど。

俺もリラの前では仮面を外してるつもりなのにそこまでの威力を持った顔はできないよなあ、と思ってビックリした。会ったときには鏡に写したようにそっくりな表情だと思っていたのに。

その大好きな本気笑顔が見れたので、叩かれがいても有ったか、と自分を慰めていた。